

第6回IT総合戦略本部新戦略推進専門調査会農業分科会 議事要旨

1 日 時：平成26年5月14日（水） 17：30～19：30

2 場 所：中央合同庁舎第4号館 第4特別会議室

3 議 事

(1) 開会

(2) 農業の国際競争力強化に資する農業情報創成・流通促進戦略（案）について

(3) 「世界最先端 IT 国家創造宣言」及び「世界最先端 IT 国家創造宣言工程表」の改訂案について

(4) 意見交換

(5) 閉会

4 配布資料

【資料1-1】農業情報創成・流通促進戦略（案）（全体像）

【資料1-2】農業情報創成・流通促進戦略（案）※

【資料2-1】「世界最先端 IT 国家創造宣言」の改訂案（農業関連部分抜粋）※

【資料2-2】「世界最先端 IT 国家創造宣言工程表」の改訂案（農業関連部分抜粋）※

【参考資料1】攻めの農業：農業情報流通促進戦略（案）の方向性
（第5回農業分科会資料）

【参考資料2-1】「世界最先端 IT 国家創造宣言」の改訂案（農業関連部分抜粋）
（第5回農業分科会資料）※

【参考資料2-2】「世界最先端 IT 国家創造宣言工程表」の改訂案（農業関連部分抜粋）
（第5回農業分科会資料）※

※出席者限り

5 出席者

澁澤座長、酒井構成員、田中構成員

総務省情報流通行政局

経済産業省商務情報政策局

農林水産省大臣官房統計部

内閣官房 情報通信技術（IT）総合戦略室 遠藤政府CIO

神成政府CIO補佐官、市川参事官、田雑企画調査官

6 概要

事務局から、資料 1-1、1-2 に基づき説明し、以下の意見があった。

○図の 3 つ目の口の「今後の農業技術動向の把握・調整」はあまりに一般的すぎる。中身としては、これは連絡会議体の設置、推進体制をここで述べている。そのため、そういう形で推進体制を整備するというような文言になるのではないか。

○はい、そうです。

○背景と趣旨のところ、ICT 導入と IT の活用というのは、統一したほうがいいのではないか。

○統一します。「IT 戦略」に合わせて「IT」とさせていただきたいと思う。

○それでは、IT で統一する。IT 絡みのビジネスモデルという言葉については、ビジネスアーキテクチャーという言葉にしてはどうか。ビジネスモデルというと、技術も何もなくてもモデルになるという印象がある。この場合は、具体的なシステムの技術開発をして、それを通じてイノベーションを生み、新しく産業、ビジネスを起こすということなら、ビジネスアーキテクチャーをつくるという言葉のほうがいいのではないか。

○ご意見は事務局で検討したいが、ビジネスアーキテクチャーというと、またそれはそれで違った意味になるかもしれないので、ほかの戦略との調整も合わせて検討したい。

○「農業の産業競争力向上」に「産業」というのが入れられたということは、多分何かしらの議論があってわざわざ入れられたと思うが、ということであれば、生産現場の立場としても統一されたほうがいい。意外と全部「競争力向上」になっている。例えば生産現場において競争というと、何か産地間競争みたいな古いイメージがある。「産業競争力」というと、何か次の時代にいける感じがある。もう一つ、ここにある「市場開拓」というのが、今ある市場をどうするかというイメージがあって、例えばこの IT、情報の創成ということでいくと、時代がどんどん変わっていく。そこに新しいものが生まれたり、もしくはその時代の少しだけ先を行くというイメージがあるとすると、「市場開拓」ではなく「市場創出」とか、マーケットメイク的な感覚のほうが近い。市場開拓というと、今ある立ち位置で市場を取り合うようなイメージがあり、一方、新しく市場が変わっていったり、今までなかったものが社会の仕組みの変化によって生まれてくる場所を取りに行くのであれば、開拓になるけれども、現状の使い古された市場開拓のイメージからすると、今あるところを産地間競争で奪い合うというイメージがある。このため市場創出とかはどうか。そういう意味では、「流通促進」というのも、今、流通にとっても問題があると多分多くの方が思っているので、促進をするというよりは、「流通革新」とか、改革とか IT や情報によって根本的にこの構造そのものが変わっていくようなイメージがあるといい。流通の促進というと課題を少しだけ変えた感じがする。

○皆さん思いは共通されていて、多分その思いを表現するには今の表現をもう少し変えた

ほうがいいという御指摘は同感。事務局で考えるとともに、委員にもご提案いただきたい。

- 「開拓」と「創出」を比べると、新しいものをつくるところに「創出」という言葉だとちょっとターゲットを縛られているような気もするが、「開拓」だと両方のような印象があると思い選んだ。
- そう言われてみると、そんな気もする。
- ただ、「開拓」が農業の世界では使い古されているという御指摘は、もっともであり、結論ではないが、そういう議論もしてきた。
- 資料に「先駆的な取組を推進する」とあるが、「取組」というのは、でき上がらなくても取り組んでいるというニュアンスを感じる。だから、やはり実が上がるということも含めた意味を、例えば「取り組んで展開する」とか、そういうふうにしておいたほうがいいのではないか。
- 「先駆的な展開を図る」などか。
- 「取り組み、展開を図る」でもよいし、何しろ「先駆的」というには、まず取り組まなければいけない。だけれども、取り組んだだけではなくて、次の段階に少なくとも展開をしておく。
- 取り組みだから、成果が出なくても努力すればいいという意味合いだと。
- そうです。それでは困る。だから、展開だったら少しは結果に近づくだろう。
- 既にそれも含めて当然だと思ったけれども、書いたほうがいいと。「先駆的な取り組み、展開を図る」なり、推進なり、結果がいいのか。
- 要するに、取り組みだけではなく、結果をある程度出すという意味が入るような書き方にしておいたほうがいいのではないか。
- 今回、特に各省とも議論しても、具体的な展開まで議論しますという話はしているので、ここに展開という文字を何か入れたい。
- それともう一つ、先ほどの話ではないけれども、農業を産業とはっきりと捉えよう。何となく今まで産業マイナスの感じだった。そうすると、新製品開発というのは産業の中でも非常に重要であり、特に、我々がずっと話してきた中には、国外の話と、どちらかという先進国側の話と、それから新興国、人口爆発地域というような大きな3つぐらいに分けて、いろいろイメージしながら話していた。私はそういう受け取り方をしていたが、そうすると、それぞれに製品は同じトマトでも違うのではないか。同じ米でも違うのではないかと思う。そういう意味で言うと、それはマーケティングによってそのスペックが、少しずつ違うか、うんと違うかはあると思うが、やはりそういうマーケティングが必要なのだろう。この文章のどこかに、丁寧なマーケティングに基づく市場開拓のもとになる新製品を、新製品という言葉を使うかどうかかわからないが、そういうものが何か必要なのではないか。それがここで言う「農業の産業競争力の向上」の基礎の一つではないか。

- ここで産業競争力の構造の中では、コスト削減、生産予測、新規参入、付加価値向上で、技術開発力の向上には具体的に触れていないという意味か。
- だからそれによって、いろいろなお客さんのニーズに応えられるものを提案していく。
- マーケティング型の産業スタイルを明示したほうが良いということか。
- 要するに、産業らしくと事務局には言ったのだが、これが書かれていない。
- 冒頭のコスト低減というのは、これは技術開発の結果出てくるもので、ここでマーケティング型の競争力、技術開発ということとあわせてコスト低減という形で少し加筆して、産業らしい、競争力らしいところをここに加筆するという事でどうか。
- 魅力ある製品の提案とか、そういうものは必ず必要になる。
- 魅力ある農作物の提案というのも不思議な表現のため、マーケットの話の踏まえたという要素を入れる。
- 基本的には、安全、安心な農産物とか、そういう話になるかと。
- マーケットインという言葉は農業の世界でやめたほうが良いのではないか。マーケットインというのは、マーケットに答えがある、もしくはわかっているときに成り立っているような気が何となくする。
- 工業界では、そうやって使っていない。
- そうなのだが、農業界では、多くの人がプロダクトアウトではなくてもマーケットインだよねという言い方をする。農業界では、マーケットインでやれば成功すると。でも、マーケットインという意味で、やはり答えがない時代の中で、いまだに農産物の取引ばかりで、取り組みをしていくということがない。PDCAを回しながらマーケットでどんなものが本当に必要になっているのか。バイヤーも、生活者の人が何が欲しいかわからない中で答えを見つけ出す活動がどんどん始まっている中で、マーケットインと言うと、農業者の人たちはみんな「答えを教えてくれ」「何をつくったらいいのだ」「それがマーケットインだろう」みたいなところが多い。ですので、マーケットインという言葉より、マーケットメイクとか、何か違う形で言ったほうが何となく次の時代的なイメージがあるように感じる。
- マーケットインというのは確かに何となく定義が明解になっていない部分もある。それは要するにその関係者の成熟度合いによる。例えば、ドラッカーによると未来は見えているが、ほとんどの人には見えていない。だから、ドラッカーによれば、世の中で一番最初に何かやった人がいる。ほとんどの人が知らない。だけれども、それがわかっているいいものだということが見えれば、それが未来だ。だから、そうするとマーケットインというのは、もう昔からずっとつながってきているマーケットというものと、これから動き出したマーケットというものが一緒にある。我々が製品企画をしたり、あるいはそういうものをつくろうと思って技術企画をしたりするときには、先のものを見ている。あるいは、ずっと続いてきたものだったら、そこにある問題点、高いとか、味のばらつきが大きいとか、そういう問題点を解決しようという技術開発もあるし、それからこち

ら側になると、もう少し柔らかくしろとか、何かそういうものもいろいろある。だから、マーケットの中には、そういういろいろなものがあるという認識をまずしなければいけないということを頭に置いておかないと、誤解が解けないままになってしまう。

○十分よくわかるのだが、例えばこういう戦略を発表したときに、多くの人が理解しないままに、多分一般的なマーケットインというイメージで認識されることを懸念している。例えば今まではサプライチェーンと言われていたものが、デマンドチェーンとどんどん変わってきた。それが今、例えばどちらでもなくバリューチェーンをつくろうと変わってきたとすると、マーケットインというのが何となく農業の世界では一般的で、消費者からはサプライチェーンからデマンドチェーンという言い方をされている。要するにサプライチェーンは、つくったものをどう流していくかではなくて、欲しいものを売り場からどういうふうにつくるかをやってほしいというのだが、その売り場すらわかっていないから、デマンドチェーンの言うとおりにしたら、売れなくて全部返品みたいなことが起こってもいる。

○それは操作が悪い。

○要するにそのどちらかの方向という意味ではなくて、バリューチェーンというのは双方向でつくっていきましょうと。農業界においてマーケットインというと、どちらかと言うと、デマンドチェーンみたいなイメージがすごく強いのではないか。

○だから、それは未熟だ。私たちはSCMのときもSCMなんて言っていない。オンデマンドのサプライチェーンマネージだ。

○ここで御提案をしたかったのは、その未熟なマーケットに対して、未熟だから理解できないけれども、マーケットインというのは本当はこういう定義だけれども、わかるかといって、わからないままこれを発表していいかどうかということだ。

○それをわからせる必要があり、わからせないまま言ってはいけないことは確か。だが、マーケットインというのは、そんなに狭い話ではなく、他の業界の人には通じない。あなたの言っていることは、自分たちの言っているマーケットインそのものではないかというふうに、違う言葉で言っていると思われるってしまう。

○例えば、食の産業でいくと多くの産業の人たちが多分、私が申し上げたマーケットインのことを言っている気がする。

○そのマーケットインの定義をもう一回お願いします。

○マーケットに答えがあって、こんなものがあれば売れるよ、だからこういうものをつくってほしいということだけを言っているという意味だ。

○マーケットにあるというのは、見えている人と見えていない人がいるということ为先ほど言った。

○わかりました。お伝えしたいことはそういうことなので、あとはどうするかを決めていただきたい。

○新規参入がこれからどんどんあることを期待しているではないか。その人たちのマーケ

ットインというのは、多分いろいろなものを含めてマーケットインというはず。そうすると、その人たちとは多分定義が違ってしまう。サプライチェーンよりずっとマーケットインは深い。

○では、マーケットインという用語を普通に使い、逆にそれでいろいろな方が入って、議論されたような農業におけるマーケットインの使い方も広がっていくことを期待して、そういった形でマーケットインを使うということでしょうか。

○できれば欄外に、マーケットインというのはこうだというものがあるかもしれない。

○ちょっとそれは恥ずかしい。

○そうですね。農業エンジニアでもマーケットインというのは、通常の業界で使われるのと同じ使い方をしている。

○座長やほかの構成員を含めて、皆さんに広く本戦略のアピールをしてほしいと思っているのだが、そのアピールをするときに、そういう狭い意味で捉えないように留意してアピールしていくということでしょうか。例えば今の IT 戦略の分科会の中で IT 戦略に加えてもう一つ戦略をつくってしまったのは農業だけなのですから、それを逆に広く農業分野でいろいろなメディアに広めていきたい。そういうときには誤解されないようにきちんと広めていくよう留意するというので、本文では普通にマーケットインを使うということでしょうか。

○マーケットインの定義についての問題提起は重要なので、これから乗り越えるべきハードルの一つがはっきりしたということでしょうか。

○本当におっしゃるとおりで、マーケットインという言葉が象徴するように、誤解のある言葉が多い。高付加価値化と言えば、高糖度トマトをつくるだけが付加価値化で、7割のコストで同じような品質のものをつくるということは高付加価値化だと思われていないとか、多分いろいろあるので、マーケットインという言葉が今出たがども、同じように農業の世界の定義に関して、普通の産業を確認していくことをやっていきたい。

○その辺の用語のいろいろな誤解のあるもの、あとは収量とかのいろいろな曖昧な話もあったのですが、その辺の話も、連絡会議体みたいな場もうまく使って、いろいろ議論したらいいのではないかとすることは、実は農林水産省の一部の方と議論を始めているので、その辺も含めて進めていきたい。

○それはいいですね。

○実はそういう用語の話も、標準化の議論の中で一緒にやっていくべきではないかということ農林水産省側からも提案をいただいております、その辺もあわせてやっていきたい。

○付加価値とか高付加価値でも、おいしいトマトを1個つくっただけでは売れないので、その需要に合うように安定して周年出荷して、リスクをとって初めて付加価値がつくのだが、農業の場合は、何か一つ甘いものをつくったら付加価値だと誤解されていて、そういう行政からの技術指導もされている。ここらあたりももう一遍掘り起こして、丁寧

に説明するということだ。

- はい。やはりいい機会であり、標準化に関してはその辺のこともやらなければならないので、あわせてやりたい。
- 産業に発展するには、市場のいろいろな性格を正しく理解することが一番最初にある。だから、同じものを持って行っても、日本だったら当たり前ではないと言われるものが、ある国に持って行ったら「これはいいね」と言って高い値段で買ってくれる可能性がある。そうしたら、日本では普通品なのだけれども、その国ではそれは高付加価値製品。そのところを普通の産業並みにいろいろなことが理解されたり、言われたりするようになることも非常に重要で、この目的の中に入れたいといけなこともかもしれない。
- 農業においては非常に問題なのは、先ほどのようなことを既にやっている人がたくさんいるのだが、それがなぜ今回、流通という言葉を使い始めたかというと、それが全体として情報がうまく流通されなかったり、取り組みをやっていなかったために、非常に狭い使い方をする人もいたというのは先ほどの議論にあったことなので、先駆的なことがなされていなかったというと、それはあった。しかしそれがごく一部の局地的な、いわゆる偏っているほうの「偏在」で、あまねくのほうの「遍在」になっていなかった。それをきちんと広めていくことで全体を活性化しようということでもいいか。例が決してないわけではなく、いい物はもちろんある。ないと誤解する人がいるかもしれないので、フォローした。
- だがあえてもっと正確に言うと、結局、大部分の人がわかっていないと、ないのと同じ。行動が前と変わらないのだから。今回この目的にしていることの一つは、そのところはみんな同じ認識を持とうよということではないか。だから、そういうことでいい。
- 中の人はずうではないということを知っているのだが、外から見たらそういうふうに見られているので、それは素直に認めて、きちんと変えなければいけない。そういう努力も足りなかったと思う。
- 言葉の議論もあったが、どんな読者を想定してこれを書いたのか。例えばマーケットインという用語もあったが、例えば農業情報とか、流通という言葉も、どういう理解を持っている人を想定して書かれているのか。どんな形でこれが出ていって、どんな方が読むのかというところを、整理していただきたい。
- これを読まれて逆にどういう方が読むと問題があると思われるか。逆に質問してしまうが、どこが一番引っかかったのか。
- 食品企業や、食品の卸売とか製造であるとか、小売にかかわっている方々が読んだときに、例えば農業情報というのは農業生産にかかわる情報のことを指すのか、農作物の販売全般を指すのかといった点が気になる。
- 明確な定義が今までなかった農業関連情報、あるいは農業関連データという言い方もされているが、流通及び生産に係るさまざまな情報を含んでいるという話だ。というのは、この戦略の3つの柱を見ればわかるように、生産にかかわるところは、いわゆるマーケ

ットのような話まで今回、議論に入っているの、そういった意味では、それに付随する情報は全て含まれると捉えられていると理解している。この戦略は大きく意味があるのは、まず農業分野にかかわる方に読んでいただきたいというのはもちろん、さらに非常に重要だと思うのは、この戦略のタイトルを見て、新規参入がきちんとふえていくということだ。だから、農業にちょっと興味がある人がこういうものを読んで、今度どんどん入っていく、あるいは、自分をもっと関わりを持とうという方をふやすというのが、やはり戦略の大きな役割だと思います。農業に興味を持つ多くの方に読んでもらいたいし、今、農業にかかわっている方に、自分たちが変わるきっかけとなるものとしてこれを読んでいただきたいというのが希望。その思いは多分多くの方が共有していると思うがどうか。

- 補足すると、農業に関わる方と言っている範囲は、もちろん生産に関わっている方だけではなくて、農業情報に関係する方針なので、農業情報に関してのいろいろなサービスを提供している IT 関連の企業の人ですとか、農業のデータを収集したり分析したり、提供していくという人たちも含んでいるので、だからそういう意味では、いわゆる情報産業にかかわっている方ももちろん深くかかわっている。
- 食品産業と言いますか、農産物を卸売したり、加工したりする人たちはあまり関係ないのか。
- もちろん関係ある。
- 食品産業でも、どこで生産されたかについて意識のないような食品産業は関係ないかもしれないが、農業とともにやろうという食品産業はぜひ読んでここに入ってきてほしい。要するにトレーサビリティも、販売することしか頭のないような、そういった食品産業は読まなくてもいい。対象ではない。
- つまり自分で閉じている人には、別に無理に読んでもらう必要はないということか。
- むしろそういう産業は淘汰されたらよい。生産者から流通、小売までの情報共有の必要性がある。市場開拓というのは、一気通貫でその全体像を見ることになる。だから、食品産業のみから見たら偏ってしまう。あくまでもスタンプポイントは農業生産の側から、すなわち製造業のほうから見ているというような理解を。
- 広く農業にかかわる中で自分を変えたいと思う、自分たちを変えよう、次を見ようという人たちに読んでほしいというメッセージでいいということか。
- その通り。
- 逆に、それぐらい読んで価値があると思わせないといけないので、今年度、頑張らなければいけない。
- 食品産業全部となるといろいろあるから、単にそこでイエスとかノーかというのは今は言えないという理解でよいか。
- 農業情報というものを一言で定義すると、何という言葉になるか。どんな意味になるか。
- 農業情報だから、食にかかわるいろいろなものに入っている全ての情報でいいのではな

いか。農業に絡むさまざまな情報でいいのではないか。明確に定義はできない。それは分野によって異なる。

- この件に関しては、農業情報学会というものがあり、ここで学術的に農業情報というものを定義しており、これは圃場の生産、加工、流通、マーケットニーズまで含めたものを農業の情報と言っている。
- 全部入っている。
- はい。多分農業情報というのは、食品とかスーパーマーケットだけを取り上げた農業情報という用法はない。農業生産までも含めて、生産の圃場から、農産物が店頭でどう扱われているのか。顧客ニーズ等とどう対応するのかというときに、農業情報という用語を用いている。
- それはまさしく問題ない。
- そういう理解か。了解した。
- 今、開拓、創出、産業競争力の中で、技術開発能力、新製品開発能力を持つ農業版としてももう少し加筆、言葉を考えるような修正、字句修正も含めて提案があった。これは全体としてこの提案の方向でよい、意思も伝わったということで、字句の修正は事務局と座長で一緒に考え、それをもう一度構成員確認の上に、次の専門調査会にかけるということでよろしいか。

「異議なし」と声あり

- その結果は専門調査会に報告して、さらに全府省の調査を経て、6月に予定しているIT戦略本部で決定する方向で調整をする。今、出口は6月のIT戦略本部での決定。それまではいくつか調整作業があるが、それも含めて御了解いただきたいと思う。それでは、次の議題であります創造宣言の農業分野に関する記述と、工程表の改訂について、意見等を踏まえて修正案をつくったので、事務局から説明をお願いしたい。

事務局より、資料2-1、2-2に基づき説明し、以下の意見があった。

- 先ほどの意見を踏まえて、資料に「国際競争力」とあるためこれは「産業競争力」にして、その下は「産業競争力」に。産業競争力があれば当然、国際競争力もあるということで、この国際競争力は産業競争力としたい。さらに、同じセンテンスのずっと下の「これらの取組などにより、IT・情報活用した」は「ITを活用した」でシンプルにしてしまおうかと。
- ノウハウの話はその前にも書いてあるし、下のほうにも入っているから、「ITを活用した」にする。
- 「情報」は要らない。

- 入れると、「情報技術と情報を活用した」となってしまうので、一般に IT という情報も入るため、「IT を活用した」にしたい。省庁のほうでは、これは検討を終えているわけだがこの場でまた改めて御提案なり、修正なり、御意見はないか。
- 直前に直していただいて、後で必要なところを指摘している。
- 総務省も経済産業省もこれでよろしいですか。
(ないとの回答)
- 一部細かい修正がまだあるかもしれないが、基本的には1回は見ていただいているという状況だ。
- KPI のところで、「農業周辺産業におけるサービス産業的部門の」の「的」というのは何か。
- 曖昧だ。
- 「的」をやめて、具体的に何か書いてはどうか。
- 「サービス産業的部門」という言い方がおかしいのは明らか。
- 意味はわかるような気がする。しかしこういう言葉で定義されるものがない。これは KPI だから、「K」になっていないと困る。だから、何か脚注を加えてもいいから、何かしないといけないのではないか。
- 趣旨はわかるけれども、日本語的にやはりおかしいから表現を変えたらどうだという話か。
- そういうことだ。
- これは「農業サービス産業」ではまずいか。
- 「農業サービス産業」でいい。
- 農業サービス産業は、資材とかの販売もコンサルタントも全部含めて、トラクターや機械やそのものを売る以外はほとんど全て農業サービス産業。
- それならば最初から「農業サービス産業」としたほうがいい。
- 「農業サービスの売上割合」か。
- その前にある「農業周辺産業の経営」というのは書く必要はない。
- 先ほどの議論のような、言葉の誤解があるかもしれない。
- 農業サービス産業でいい。
- KPI「ガイドラインの策定状況」というところだが、ガイドラインをつくることは、つくるだけだったらできるが、それがどれくらい生かされているかというか、それに沿って民間で実行していただいているかわかるような指標にすると、よりよい。
- そのとおり。
- ただ、長い期間の中のこの年度は、例えば策定をします、それを使って、その先は実際にそのガイドラインがどう生かされているかをチェックします、こういうステップになっているときの1年目の話をしていると、こういう書き方もあるかなど。どちらなのか。
- おっしゃるとおり、この KPI は毎年必要に応じて見直すということにしている。

- まず、今年は策定として、来年度これが変わるべく努力をするということでしょうか。
- 結構だ。
- ありがとうございます。おっしゃっている趣旨はそのとおり。
- 今、農業サービス産業という議論があったところで、その下の日本型農業サービスソリューションという言葉が重なって、混同してしまいそうだ。
- これはこういう定義はない。これを日本型のサービスということで提供している民間の新たな企業もない。これは農業機械メーカーか何かを含めているのか。
- 含めている。「日本発の」にすればいいのではないか。
- これはサービスソリューション、ソリューションのサービス、どちらを意味しているのか。
- 製造業もそうだが、ハードばかりを売っていたのから、トラクター、機械、ソフトも含めたパッケージをこれで製品として管理すると、そういう意味合いが今後の「日本型農業サービス産業」という。
- IT活用型の農業パッケージの海外展開状況ぐらいのイメージだ。そのほうがわかりやすい。
- ソリューションというのが何となく一般的にあるとすると、要するに解決型。解決型の日本型農業サービスというくくりになるということか。
- だったら、日本型農業サービスでもいい。日本でやっているのだから、日本型と言わなくても、実は新たな農業サービスの海外展開状況と書いてもいいのが、IT戦略ということなので、ITを入れてみようという意図だ。
- ここは、日本型というのを強調したいというよりも、ソリューション型の日本農業サービスか。
- 1年前はそうだったが、今回、多様なものが出てくるので、そんなにこだわらなくてもいい。
- 上でもし「農業サービス産業」と言うとしたら、下でも何か日本型の後に「農業サービス」と。言葉が重なるがどうするか。
- 「パッケージ」を使うのもいいが、その場合、上に今まで全くパッケージという言葉がないというのが気になる。
- これは日本型という定義をまだしていないから、ここでKPIに持ってきてしまうとおかしい。
- 例えば農業機械の部門では、ある経営者が中国で販売展開しているときに、値段は高いけれども、その後、故障があったらすぐに駆けつけて、サービスのパッケージも含めて提供している。そうしたら本体自体は高いのだけれども、パッケージとしては競争力があって、中国で次々とシェアが伸びている。これは中国にはない、日本の企業が発明したパッケージとあるけれども、そういう意味合いで日本型という。
- そこまでできてくればそう言ってもいいと思うけれども、まだだろう。

- 本戦略を踏まえた取り組みの展開状況ぐらいでもいい。
- 去年検討していた段階では、タイトルに「メイドバイジャパン農業の実現」と書いてあるので、メイドバイジャパンがどれぐらい達成されているかというところをどう書くかというところで、あまりいい知恵がないままこういった書き方をしてしまった。
- メイドバイそのものの定義が去年は曖昧だったけれども、具体化してくると相当いろいろなものを含むので、1年間で大分具体化されたことで、もう少し修正してもいい。
- まだ海外展開状況というのを KPI にできる段階ではないでしょう。
- 確かにない。
- これは何かそういうパッケージの初期モデルをつくるぐらいまでの話しかこの期間にはできないのではないか。
- 1つか2つはありそうだ。
- できるのか。
- もう実証を始めているところがある。
- それなら実証と書いたほうがいい。
- 農業機械でも既にサービスを海外展開するのではないですか。
- もうしている。中国が相手だけれども、実際には関連産業としては。
- まだパッケージではないのだろう。
- パッケージになったところもあった。1月に発表されたのです。
- それはメンテナンスサービスとか、その圃場で使うものなのか。
- はい。それが始まっている。
- そうしたらそうやって書ける。
- あとは文言だけだ。確かに日本型農業サービスソリューションという日本語は変えたい。
- 機械だけではなくて、例えば栽培方法とか、そこまでも含めて新しく市場をつくって機械技術、パッケージでの販売が始まっている。
- それでは、やはりパッケージにしたほうが。前のほうに少し書いておいて。
- では、IT 活用型農業パッケージか何かにするか。農業パッケージの海外展開。
- いいではないか。
- ここはあくまでも海外展開、メイドバイジャパン。
- せっかくだから元気になろうという、攻めの農業という意味では、海外展開状況ということでもいいか。
- KPI の農業 IT 市場の規模というのは、何か統計があるのか。
- これは公的な統計ではないが、民間企業がまさに農業 IT 市場について何年かに1回ずつ調査結果を公表しているものがある。
- 取りあえず、「民間統計による」と注釈でもいれたらどうか。
- 農林水産省でも経済産業省でも、こういう学術的な統計をとっているわけではないのか。
- 農林統計の世界では難しい。

- ゆくゆくそういうものをちゃんと確立していったほうがいいかもしれない。
- 項目を立てると。市場の規模では IT 農業市場、言葉はこれでいいかわからないけれども、これを農林水産省なり、経済産業省なり、産業のインデックスとして1つふやすという取り組みをするというのだったらあるのではないか。そのための相談をしたとか。
- 例えば経済センサスとか、ああいったものがあるが、ただ残念なのは5年に1回とか、そういう周期の調査。その間を毎年押さえていくというのが、既存の調査の中ではなかなか難しいという問題がある。
- そこは IT を使えば。
- なるほど。
- 産業統計として、この農業 IT 市場がちゃんと出てくるような仕掛けができればいい。
- そういうこと。
- 民間ベースのものを使って推計をしていくという方法にならざるを得ない。
- それでもいい。
- 補足すると、この調査会社は、まだ農業 IT 市場というのは小さいので、一般的に大きいと言われているところからヒアリングして推計をしているという、市場が小さいからできる方法をとっているということのようだ。
- どこまで農業 IT 市場というので、デフィニションするのか。だから、そういうところは小さいというふうに錯覚しているが、実際にはそうでもないのではないか。今の農業情報だって生産から流通まで含めるので、産業規模として少なくとも国内で 50 兆円で、輸入も含めて 100 兆円の対象になる。その中で使われている農業 IT となると、相当な規模になる推計される。
- この調査会社のやっていることは、純粹に IT のシステムを売っている売り上げを対象にかなり厳密にやっているものであって、農業の IT を使った分母というか、IT を使って広がっているベースの部分ではない、限定的な数え方をしている状況。
- 考えていかなければいけない。
- どこかをネタにしてというか、どこをもとにしてやっていくか。
- KPI にかかわる記述を少しわかりやすく訂正するという意見が出され、対応するということで、あとはそれほど大きな修正、訂正、反対意見はなかったが、これでよろしいか。なければ、今、指摘した箇所を修正ということで、専門調査会に向けて改訂作業をする。よろしいか。

(「異議なし」と声あり)

改訂案については、他の分科会で議論している部分とのオーバーラップも含めるので、新戦略専門調査会が5月28日に予定されているが、6月に予定している IT 総合戦略

本部で決定する方向で調整したいと思う。

(閉会の挨拶)

○農業が世界に冠たる日本のほかの産業と伍していく、要するに、世界に覇を唱えられるようにするために、どういうふうにしていったらいいのかという観点での話が大分出てきたということで、そうやって見てみると、結構やっているものも随分ある。ですから、その辺のちぐはぐな状態を早く良いほうへ寄せるといって全体が動き出せばいいのかなと。だから、まるで悲観する必要もないけれども、やらなければいけないことは大変多い。いろいろな先進的な産業があるので、そのいろいろなやり方を農業の中にどういうふうに取り入れていくかということも含めて、いろいろな考え方を学べるところは学ぶという姿勢も、この分科会の戦略の中に少しずつ織り込んでいくことができれば、大変役に立つのではないかと。ぜひ、そういう方向に向けての今回のこの戦略の工程表の見直しというところに、座長の御一任ということになったので、皆さんの意見を入れて、ぜひまとめていただけたらと思う。

以上